

## 病気の芽摘むのが「未病を治す」の意

**Q** 漢方の本に「未病（みびよう）を治（ち）す」という言葉が出ていますが、どういう意味ですか。症状がないのに人間ドックで初期のがんを発見するような現代医学とどう違うのですか。

**A** 「未病を治す」という言葉は漢方医学の最重要古典に出てくるもので、漢方治療の根幹をなす哲学思想である。中国で紀元一世紀ころに書かれたとされる『素問』（そもん）や『靈枢』（れいすう）には「上工（上級な医者）は未病を治し、已病（いびよう、病気になった状態）を治さず」などがある。優れた医師は症状が現れないうちに心身のアンバランスな状態を見抜き、病気の芽を摘み取って大事に至らないようにする、といった意味である。

紀元三世紀ころの『金匱要略』（きんきょうりやく）には「未病を治すとは、たとえば上工は『肝』の病（ストレスによる自律神経失調など）を知ったら、肝の病が『脾（ひ）』の病（消化器の病気など）に伝わらないように配慮する。中工（普通の医者）は肝の病が脾に伝わることを知らず、ただ肝だけを治療する」といった記載がある。

これは部分だけをみて治療を考えるのではなく、常に全身への目配りを忘れず、早め早めの対応をするといった意味で、いわゆる現代医学的な病気の早期発見・早期治療とは異なる。病気をパーツ（部品）の異常としてではなく、自己回復力を持つ生体全体としてみる重要性を説いている。